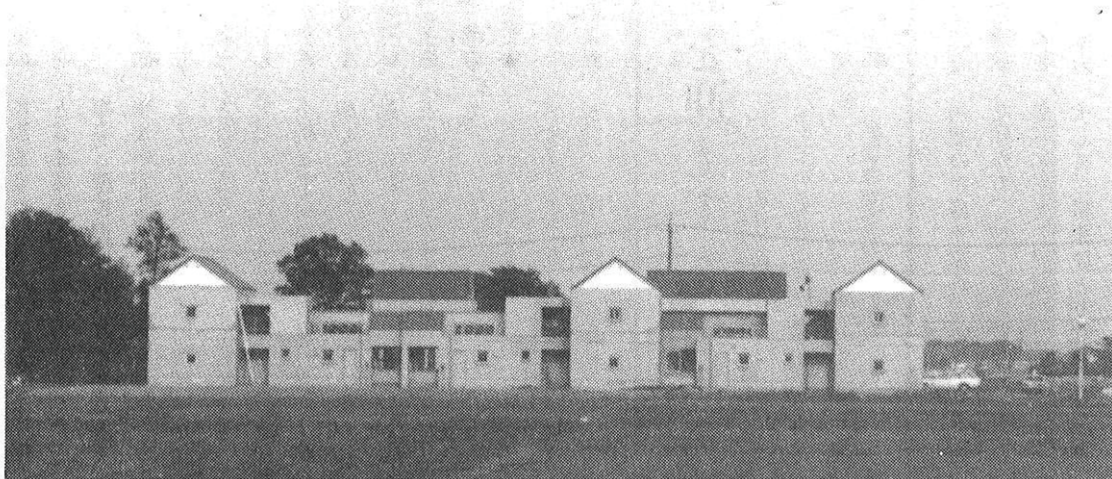


光の子

発行／社会福祉法人光の子どもの家
編集／光の子どもの家編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480-72-3883

子
ど
も
の
家
全
景



あいさつ

理事 原田史郎

「そして、あなたがたのうちに
良いわざを始められたかたが、キ
リスト・イエスの日までにそれを
完成して下さるにちがいないと確
信している。」

ビリビ人への手紙

第一章六節

多くの方々の祈りと御支援のう
ちに「光の子どもの家」もやっと
産声をあげることになりました。
今、大利根町の広い畑の真中に、
次第に建物も姿を現し出しました。
やがて桜満開の四月には、元気な
子どもたちと潑刺とした新職員が
この中を駆けめぐっているでしょ
う。

さて昨年十二月二十九日、三十
日、私たちは、第一回の職員研修
会を東大宮教会と十軒農民センタ
ーでもちました。巷は年末の慌し
さの中になりましたが、ここでは
四月から始まる新しいわざに向っ

て、心を集中し、真剣に学びと交
流の時をもちました。できるだけ
身近なテーマから出発しようとい
う訳で、主題は「私にとって社会
福祉とは」というものです。

勿論、一回の研修でそのことを表
わし尽くせることではありません
が、福祉との関り接点は明らかに
なつたと思います。

私たちがこれから何をしようと
しているのかその意図していると
ころは、この記録をご覧いただけ
ばその方向性を分っていただけ
と信じています。それは聖書に示
されたみことばを、隣人愛として
実践していく。しかもこの実践は
高い所から低い所へという、とか
く私たちのおちいりがちな管理者
的発想ではなく、主イエスが低く
仕えるお方としてこの世に来て下
さつたように、子どもの側に立っ
て歩むことに徹したい、というこ
とです。近江学園の糸賀一雄氏の

配し、基本的生活集団である「家族」を形成します。内部はそれぞれが独立して共同生活できるように設備が整えられています。全体のルールや行事は必要最小限にとどめ、生活運営はその「家族」にまかされ、独自性と家風を尊重します。なお建物の外観は、穀倉地帯に調和するように「蔵」を模しています。

また、どんな理由であっても、子どもが肉親や家族と別れて暮らすことは、悲しくてつらいことに違いありません。そこで子どもの入所後も、できるだけ親や家族と連絡・協力して養育に当ります。

われわれの根本精神は、無償の愛であるキリストの愛におき「共に生き、共に祈り、共に育つ」を合い言葉に、子どもたちを地域社会の一員として育てます。学齢児は、地域の学校へ通学します。入所児が、地域社会の子どもたちと共に、健やかに育つよう願っており、精いっぱい努力いたします。

以上のように、明るい社会を建設しようとして願っている「光の子どもの家」に、皆様のご理解とご支援を心よりお願いいたします。



記念植樹の福島理事長

祈り

主よ わたしを
平和の器とならせてください
憎しみのあるところに愛を
争いのあるところにゆるしを
分裂には一致を
疑いのあるところに信仰を
あやまりがあるところに真理を
望みなきところに希望を
暗きには光をもたらすものとして
ください

主よ
なくさめられるよりも、人々をな
ぐさめるものにしてください
理解されることよりも 理解する
ものに 愛されることよりも 人
々を愛するものと

ならせてください
それは わたしが自ら与えること
により受け ゆるすことにより
ゆるされ

自分の体をささげ 死ぬことによ
って 永遠の命を得ることができ
るからです

主キリストによって アーメン
(アシジのフランススコ)

施設開設を迎えて

施設長 今関公雄

このたびはお蔭様で、養護施設「光の子どもの家」が、事業開始をする運びとなりました。これまでに寄せられました皆様のご協力に、心より感謝を申し上げます。

当施設は、健常児で事情により肉親の家庭を頼れない子どもたちを預かり、彼らの代替家庭として養育にあたる児童福祉施設です。そして、将来ひとり立ちできる社会人に育てるはたらきをします。

施設名は、子どもたちのもつてい

ことばでいえば「この子らに世の光を」であるよりは「この子らを世の光に」であります。

おそらくこの私たちの願いは語るに易く、行うに難しでありました。それだけに、何よりも私たち自身に甘えがゆるされないでしようにし、それだけに自分と対決する修練が必要でしょう。でも、それだからといっていつも歯をくいしばってやるというよりも、主の導きと福音の豊かさの中で、喜びある証をしていきたいと祈っております。

「光の子どもの家」がこのよう

に設立されるまでに、大きな困難とさまざまな障害がありました。事実、壁に直面し、うめかざるを得ない時もあり、それだけに祈りなくしては、とうてい前に進むことはできなかつたと思います。

そのことによつて、私たちの志が、不純なものかそうでないものか厳しく試みされ、又人間の思いに動かされないで神のみ旨を問うことの大切さを学ぶことができました。

しかし何より感謝すべきは、皆さま方からの御支援をいただいたことで、それがどんなに私共への励ましであつたか知れません。ここに厚く御礼申し上げます。

どうかこれからも引き続いて「光の子どもの家」のために、より一層の御理解と御支援、時には御叱責を賜ります様、お願い申し上げます。

この記録によつて、皆さまと私共との結びつきが深められますように。又皆さまお一人お一人の上に主の祝福がありますようにお祈り致します。

主の一九八五年四月一日

働いていた三名のキリスト者福祉職員の願いから始まりました。それは、真に子どもたちのため、子どもの施設を建てたいとの一念によるものであり、さらに埼玉県の児童福祉に多少でも寄与したいと願つたものでもあります。

幸い、沢山の御尽力を賜わり、厚生省・埼玉県の認可と委託をいただき、児童福祉法にもとづく養護施設として、このたび開設することとなりました。ただこの間、施設建築と事業内容について、地元住民の皆様への事前説明が不足したため、教育環境への不安などで多大のご心配をおかけいたしましたことを、この紙面を借りて深くお詫び申し上げます。

当施設の特徴は、家庭的処遇をめざすところにあります。入所児は、満二才から十八才未満の三十名で、一職員（保母）が五名の子どもを責任担当し、家庭的処遇によつて情緒安定と健全な人格形成を追求します。子どもたちの生活は、三軒の家で展開されます。生活のサイズを普通の家庭と差異の少ないものとし、二階建ての各家の各階に子ども五名、職員一名を

た・び・た・ち

一九八三年四月、北埼玉の養護施設で働く数人が祈りました。祈りは、光の子どもの家設立準備会を成らせ、全てが無そのもののなかで人々は真陰に祈り合いました。

今、養護施設光の子どもの家は悠久のときを流れる利根川のほとりに完成しました。昨年末から研修を重ね、待機し、準備してきた若い働き人たちの、傷ついた幼く若い魂に仕えようと心熱くして祈る「たびだち」の決意を特集しました。
(編集委員会)

四月二十五日。

弘前桜まつりの初日。これで、もう二・三年は、この桜を見ることができないんだなと思いが、三、四個しか花の開いていない木を眺めて公園を一周。

今年の桜は埼玉で見えるのかなと青森から急行八甲田に乗ってこの地へ来ると、あいにく桜前線は通過した後。

今、目の前に建っている子どもの家を見ていると、初めてここへ来て目にした光景がうそのようです。「こんな所に、人が住めるのだろうか。たまらない不安……」にもかかわらず、五月下旬の雨に洗われて太陽の下に建っている姿を見た時、周りの空気に溶けこんでいて新鮮で美しいと思いました。二十二年間、一度も他の土地でくらししたことのない私が、遠く埼玉まで一人で来ようと思ひ、実際に来てしまったのは何故なのか、今でもよくわかりません。ただ、どこまでやれるか確かです。教育実習で中学校へ行つた時、生き生きとした生徒たちの目が、いろいろ

秋元光代

な可能性を含んでいるように思え、これから子供たちといっしょに生きていきたいと思つたのはじまりでした。子供の一番近いところに居るにはどうすればいいのだろうか。そう考えた時、児童養護施設が頭に浮かんできたのです。「大変な仕事だよ。」「お給料も安いし、休みも当てにできないよ。」そう言われてもあきらめることができませんでした。ここへ来てから、もう一ヶ月が経ちました。施設の事は、私が考えていたより難しく、また、思っていたより易しい部分もあるようです。子供たちと接していく中で、自分も一人前の人間になつていきたいと思ひます。

ほぼ出来上がった「光の子どもの家」。一寸、小人の家を思わせる子供の家たち、化粧は厭だと云つて様々打ちつばなしのコンクリート、子供たちの為を考え抜いた細やかな配慮が隅々に迄感じられる。何よりこの夜の風景が好きで、庭園灯が灯り、三つの子ども家の玄関口に明かりが点くと不思議とほっとしてしまふ、そんな建物。一体、どんな子どもたちがここに来るのだろうか、男だろうか女だろうか、いくつの子が来るのかな、早く逢つてみたい、そんな事許り考えて、自分にどれだけの事が出来るのだろうか、本当の子ども達の働きが出来たらどうか、心から子どもたちを愛せるだろうか、期待と不安が去来する。この地に来て未だ間もないのに、子どもたちが来ていない今でさえ、施設の子に対する大人の偏見、人間のエゴを垣間見た気がします。

これから子どもが来て、それを目の当たりにした時、その痛みはどれ程の事か。だからこれから、そんな大人の偏見やエゴと闘つて行きたい。例え負けると判り切つても、いつも向かつて行く自分でありたい。それは大人の目に対する事に限らず、子どもたちの淋しさや辛さ、そして何より自分の心の貧しさと常に闘つていく自分でありたい。きつと、疲れた時や打ちのめされた時、それすらも判らなくなつてしまふのだろうか。そんな時にはまた夜にでも、この建物を眺めながらぼつとして、取り戻せたらと思ひます。だから期待は兎も角、不安を抱くより、もっと大切なものを、一番大切なものを、見に行きたい、祈りつつ。

丹羽倫己

「出発」ということは私にあるのだろうか、と考えてしまいます。あと何度自分自身卒業すれば本当の自分にたどりつけるだろう。私はあがき続け、手さぐりで生きてきたような、そんな気がし

ます。そして、これからも……。今は不安。子どものために何が出来るだろうか、何をすればいいのだろうか。などと。それは誰もが同じだと思うのですが……。でも、私は不安だらけの中に光を求めていきたい。何かに飢えた、何かを求める、そんな眼をしていたいと思ひます。高校の時、先生に「自分のことはあとでいいから隣の人のことを考えなさい」と言われてきました。私はとても未熟ですが、自分のことを中心に物事を考えてしまいます。こんな私ですから、そこまですべて自分を捨て切れないのでは、と思ひます。私たちの仕事は人と人とのかわりあい。その中で、子どもたちは私たちを見て、いろいろな影響を受け、育つていきます。私たちがたたく大人の足跡を踏みにじてきたように、子どもたちも、私を踏み台にしていくのでしょうか。私たちの果たす役割りというのは本当に重要ですね。光の子どもの家。が子どもにとって心の逃げ場所、安らげる場所、最後に帰り着く場所であつて

池田祐子

ほしい。子どもたちを、すべての人を愛していたい。子どもたちのためにいい仕事をしたい。今、そう思つてます。昭和六十年四月二二日。私の、家族からの出発記念日です。前の晩、母と一緒に荷造りを手伝つてくれました。父は、背を向けたまま、ただじつとテレビを見ていました。そして朝、父は、いつものように仕事に出掛けて行きました。「身体に気を付けてな。」父らしく、一見面倒臭そうに一言、とてもあたたかいものをもらった気がしました。今考えると、家族からの出発は、「この職業に就きたい」と思つたその瞬間から、もう始まつていたのではないかと思います。毎日毎日。自分からの出発記念日にしたいと思ひます。子ども達の成長発達に遅れないように、又、もっと深く、豊かさのある人にな

る為に、毎日自分からの脱皮をくり返していきたくと思ひます。それには、自分に対してもっと厳しい目を持たなくてはいいけないでしょう。そのように努力していきたくと思ひます。○月○日。光の子どもの家の出発記念品。主人公の子どもが来て初めて、本当の意味での出発になると思ひます。子どもと一緒に出航するのです。頑張らましよう。この建物が出来るまでには、たくさんさんの人の真心があつたのだから、それを無駄にすることのないように。そして、いつかここを出発していく子どもたちにとって、ここがいい出発点となるように。一人につき一度だけの出発点でなく、何かあつたその度、その子どもにとって心のいい出発点となり得るように。

岩崎 まり子



光の子どもの家で暮らすようになってから一ヶ月以上が過ぎました。建物も完成し、毎日、環境整備に励んでいる私たちですが、きつと、誰もが子どもたちがいないまま一ヶ月以上も過ごすなんて思わなかったでしょう。子どもたちとの生活への期待と不安が日ごと

に大きくなってきています。

ところで、もうひとつ私が想像していません。それは、コンクリートの壁がきです。まさか、家中の柱や壁をサンドペーパーでみがき上げるなんて思ってもみませんでした。毎日、頭から足まで真白になって壁をみがいているおかげで、初めに私が建物から受けた冷たい感じが、今ではとても親しみ深い愛着のあるものに変わってきました。汗をかき、粉まみれになってこそ、私が（私たちが）作ったのだ、という感情が出てくるのではないのでしょうか。

子どもを育てることも同じことだと思えます。自分自身が傷ついたり苦しい思いをしなければ、子どもに対する本当の愛情なんて持てないと思います。それはとてもつらいことだし、精神的にも厳し

いものだと思います。でも、私はいつか子どもの心の痛みや喜びが、私自身のものとなるようにと願っています。保育一年生の私には、子どもたちのために出来ることは本当に少ないかもしれません。けれども、いつもこの願いや思いを忘れずに前向きに歩いて行きたいと思えます。子どもの話を最後まで聞ける保育者になりたい。

いつも子どもの方に耳を傾けることの出来る保育者でありたいと思えます。そして、子どもたちが安心して寄り掛かれるような存在になれるように努力していきたいと思っています。

上棟圭子

ただひたすら建物の完成を待ち、なかなかできあがらない建物を見てはため息をついていた四月始め。次々と仲間が集まり力づけられた四月末。全員の顔が揃い、仲間との生活が始まった五月。そして六月。今、光の子どもの家が動き出そうとしています。

長い時間を費やし、多くの方々

の御苦労と御協力によってできあがった光の子どもの家……。まだ材木の転がっている部屋を歩きながら「これからここで仕事ができるんだ。良い仕事をしなくては……。」と思うと共に「この立派な建物に負けない内容づくりは難しいな。」と不安にもなりました。

でも、もうそんなことを考えてはいられません。これから私たちは、光の子どもの家の第一走者としてスタートをきります。フラッシングは三回で失格。スタートでもたついてしまおうと後の人に迷惑をかけます。とても大切で責任重大な第一走者ですが、第一走者には選ばれたことに誇りを持ち、第二走者にバトンタッチするまで一生懸命走りたいと思っています。

最後になりましたが、一ヶ月間、職員の皆さんと共に生活し、良い仲間に出会えたこと心から思っています。これから先は今のようによいことばかりではなく胸を痛めることも多いと思いますが、現在のようない仲間関係を保っていかれたらステキだなと思っています。子どものためなら何でもできる職員になり、子どものためゆ子どもの

倉沢智子

施設、光の子どもの家をみんなで作っていきましょう。

新設される養護施設があると聞いて、そこで働いてみたい、自分たちの手で歴史が作れるなんてすばらしいと、胸が高なつた日から半年以上過ぎました。起工式での何もない土の上から、人間の手によって姿を現してきた建物。その建物の中で、これから仕事をし、子どもたちと共に生活することを想像すると、最初の頃の胸の高鳴りは、一段と膨れあがってきます。そして不安も同じように膨れあがります。しかし「光の子どもの家」の下には、職員全員の名前を記した聖書が礎としてあると思うたびに、力づけられ、しつかりしようという気持ちになります。

大利根の地で、子どもがいない生活が一ヶ月以上続いています。壁みがき、掃除、その他いろいろなことが一つ一つ必要な準備となるわけです。しかし、つい不安に

かられたり時間を浪費をしてしまふこともありました。そして今、子どもが入ってくる日が目前となり、あれこれ思い迷い、不安が溢れそうになります。しかし、子どもが入ってきた日、それは私にとって大切な出発の日となるでしょう。

出発の日に寄せて、私が日々生活している中で、いつも心にとめている言葉があります。この言葉をもう一度、新たな気持ちで受けとめ、一歩一歩進んでいけたらと思えます。「親切で慈しみ深くありなさい。あなたに出会った人が、だれでも前よりもっと気持ちよく、明るくなつて帰るようになるさ。親切が、あなたの表情に、まなざしに、ほほえみに、温かく声をかける言葉にあられるように、子どもにも、貧しい人にも、苦しんでいる孤独な人すべてに、いつでもよろこびにあふれた笑顔を向けなさい。世話をするだけでなく、あなたの心を与えなさい。」（マザーテレサ）

石毛照子

今の心境は、果てしない道を目の前にスタートラインに立たされ、どんな困難があるのだろう、その困難を乗り越えていけるのだろう、どこまで行く事ができるだろう、と不安だけがどんどん積っているような気持ちです。

仕事をしているとつても、今は子どもたちを迎えるための準備であつて、子どもたちと生活している訳ではありません。私にとつて、待機している、というのは大変辛く感じられます。他の職員の方々は、子どもたちに接した事があり、又、児童福祉について学んでいるのでそれなりに対策を練る事もできていると思います。しかし私の場合、子どもの生活そのものも知らず、理屈も全く知りません。どんな風に何をしたらいいのか見当さえつかないのです。こんな私が、実際、子どもを相手に何ができるのか、全く見当がつきません。自分が無力だというのは分かりきっています。だからこそ「案ずるより生むが安し」で、「分らない、分らない。」とあてのない答えを探しているより、体当たりで子どもとぶつかりたい、

館山理可

と想うのです。

どんな難関が待ち伏せているかは「神のみぞ知る」ですが、それなら思い悩むより、恐れずに、その困難に自ら近付いていくしか私にはありません。

養護関係の本を読んで可哀想だとか同情心のようなものではない事を思い知らされました。そんな今、早く子どもたちと出発する日が来ることを願うだけです。

私にとつての出発とは、社会人となつた時、教会で洗礼を受けた時、そして結婚した時。いずれの時にも私にとって一大出来事でありました。

大学を出て埼玉県内の養護施設に就職し、七年間メシを食べさせてもらい多くの事を学ばせてもらいました。その間多くの子どもたちを、中卒で、わずかですが高卒で社会へ巣立たせました。ただでさえ、誇らしくもない施設出身というハンデを負った彼等は、きつと不安とすこしばかりの希望を胸

に厳しい社会へ出発していきました。その中でも多くの子どもたちが失敗を繰り返しながら、悩みながら現実を思い知らされ、それぞれにささやかな希望にすがりつくように一歩一歩確実に、一人の大人になるために必死になつて前進しつづけています。

光の子どもの家の設立は、私にとつて、これまでも、そして今後、生涯を賭けたものとも重大な、そして大変な出発になるだろうと心から感じています。

私の家族はもちろんのこと、親まで巻きこみ、文字通り人生を賭けているからです。今、私は、不安と希望が入り交つた緊張のなかで、もう後へは引かないと決意しています。前進しかないので。そんな時、不安と希望のなかに巣立っていった子どもたちを思い出します。そして同じような状況で出会う子どもたちも。それらのみんなと、一緒に働く仲間と、家族と、親も、そして何よりも神さまとともに、頑張るぞ！敗けないぞ！

田中郁夫

五月一日、職員就任式の日の記念樹、モミノキが、すっかり根をおろしたようです。先日は、モクセイ、キンモクセイ、ヤマザクラ等、いろいろな種類の苗木が植えられました。緑のあざやかな季節の中で、多くの人々に支えられて、一日一日環境が整っていく光の子どもの家です。雨が降れば、そのまま田植えができそうな状況は相変わらずですが。

やっと建物ができました。今度には子どもたちと共に、それを「家」として創っていきます。職人さんたち、工事機械と入れかわりに小鳥たちがやってきました。暑い夏を前に子どもたちをむかえる日が近づいています。

竹花信恵



☆五月一日、北から南から熱い思いをもて余し気味で集った職員十二名、新築成った施設玄関ポーチに樅の木を記念植樹。福島理事長より辞令交付、就任式挙行。

日誌抄

光の子どもの家説明会に今関施設長出席。深夜にわたり話し合う。

☆五月十二、十四日、施設を公開して地元民への説明会。約五十名来訪。熱心な対応で盛り上げる。

☆増田設計士、山口、岡田現場監督、左官の小林、関各氏。蓮田市の佐藤辰五郎氏等が下さった植木に栗原造園様が多数庭木を加えて立派な庭園を寄贈。サンワみどり会の苗木百本を栗橋ボーイスカウト隊が植樹祭を六月九日に、梅沢三保様とお仲間の方たちにより庭の中央に大樺が。新しいシンボルとなりました。感謝。

☆ここに至るまでに多くの方々の物品の寄贈に助けられました。氏名を記して感謝の意を表わします。

樋山千代子、前川文子、五嶋玉枝、牟田黎子、倉沢園子、第二厚生館愛児園、田中春女、増田政一、小野沢和美、荻窪教会、川尻、峯下良子、岩崎順子、梅沢三保、鈴木久夫、石毛和、足立まゆみ、柿崎澄夫、桜井二三子、安田尚子、宗浄子、杉崎悦子、田口幸子、長崎家具店、保田春江、爪田裕、大塚勇四郎、倉沢のり子、川島商店、山口恭平、萩田雅士、花典子、

宮岡とみ子、小林和子、共同急配、西千葉教会、峰岸建具店、ミナト家具店、大利根商店会有志。

(敬称略 六月十五日現在)

忘れられない日が重なります。七月一日、施設認可。七月十一日入所開始。H姉妹とK君。☆二年有余の日々の思いが遠く近くゆきめぐります。実に多くの人々の善意と祈りがこの施設のために集められました。感謝。

☆はじめにたった三人が「本当の意味で子どもたちのための子どもの施設を」と願った。ささやかな切実な原点を共有しつつ実践を進めようとする全職員の「たびだち」を特集しました。行間からその意気をお受け下さい。☆不備だらけで未熟なとりくみにご支援を！(G)

反射光

